

〈特集:台湾で考える日本文学教育〉

## 台湾における日本文学 / 日本語文学研究

—日本統治期以来台湾の歴史的な歩みからみる—

呉佩珍

台湾における日本文学教育という問題は、そもそも日本と台湾との近代史的な関係から考え直さなければならない。1895年日清戦争で清朝の敗戦から、1945年日本の敗戦までこのあいだ台湾が日本の殖民地となっていた。台湾における日本語教育も殖民地統治とともにいち早く始まり、植民地統治に置かれた50年間、多くの「日本語世代」の台湾人を生み出した。また、台湾文学における「台湾新文学」時期の担い手がほとんど日本語の使用者である。戦前台湾文学のなかで、最も完成度の高い文学作品は、日本語文学といえるだろう<sup>1</sup>。

第一世代の楊逵、張文環が日本近代文学から少なからぬ影響を受けていたが、楊逵の場合には、同時代の日本プロレタリア文学思潮の理論を援用しながら、台湾文壇における白話文で創作される台湾人作家、たとえば、張深切などと論争を交し合っていた。雑誌『台湾文芸』時代の論争を検証すれば、同時代日本における「芸術大衆化」論争の知恵を借りる部分が多いことが気付かれると思う。また、張文環は、台湾新文学の嚆矢といわれる、1933年に東京で創刊された『フォルモッサ』の同人であり、その作品には漱石の基調がほのめかされる一方、強烈なりリズムの手法で台湾郷土を如実に現わしている<sup>2</sup>。それから第二世代には代表的作家が翁鬧、呂赫若、龍瑛宗がいる。翁鬧の場合には、その生い立ちに関する資料が少ないため、「幻影の人」といわれている。『フォルモッサ』創刊号に新詩「淡水の海辺に」を寄稿し、台湾新文学運動に早くからかわり、その文学創作に目覚めた一人である。早世とも関係しているた

1 日本統治期における台湾人の日本語作家の第一世代は楊逵、そして張文環であり、第二世代には代表的なのが翁鬧、呂赫若、龍瑛宗がいる。フエイ・阮・クリーマン著、林ゆう子訳『大日本帝国のクレオール』（慶応義塾大学出版会、2007年）、第七章を参照。

2 たとえば、李郁蕙の「遺孀之家—日本語文學與夏目漱石」のなかで、張文環の「父の要求」と夏目漱石の『心』との背景の設定には類似性が見てとれりと指摘した。李郁蕙「遺孀之家—日本語文學與夏目漱石」『台湾文学学報』第六期（国立政治大学中文系、2005年2月）を参照。

め、寡作とはいえ、洗練されているものが多い。「歌時計」(1935)、「残雪」(1935)と「夜明け前の恋物語」(1937)などの作品には、大正期の「恋愛至上主義」、「生命主義」など日本の同時代文芸思潮からの影響がみとれる。それから台湾の農村を舞台にしているプロレタリア文学のジャンルで、叙情性にあふれる「羅漢脚」(1935)と「憨伯仔」(1935)などは紋切型のプロレタリア文学とは違い、モダニズムの手法を取り入れながら台湾の農村と下層庶民生活を生き生きとして描いている作品である<sup>3</sup>。

翁鬧とはほぼ同世代の呂赫若と龍瑛宗が現在の台湾文学研究において、すでにキャンオン化された作家といえよう。日本語作家とはいえ、両者とも中国語翻訳の作品全集が出されて、作家と作品を中心に研究されるシンポジウムも開催された。呂赫若と龍瑛宗が最も活躍していた1940年代は、すでに日中全面戦争に突入し、いわゆる皇民化運動時期に入っていた。そのため、皇民化運動がどのように作家の作品に反映されていた「皇民文学」は、最も多く研究されている。また、日中全面戦争が勃発して1940年代にかけて活躍していた陳火泉(高山凡石)、周金波がみな「皇民作家」というレッテルを貼られていて、その作品が皇民化運動政策に同調し「皇民文学」一色という印象は戦後の台湾文学研究によって強化された。しかしながら、この時期の日本語文学作家たちの創作技巧が最も円熟し、戦前、台湾新文学において最も成熟し、洗練されている文学作品もこの時期に誕生したといっても過言ではない。1945年8月、日本の敗戦によって台湾が日本の殖民地統治から解放されていたが、中国共産党との内戦に敗れて、蒋介石を率いる中国国民党の亡命政府が中国大陸から台湾に渡り、台湾を支配するようになった。日本の殖民地からやっと解放された台湾が、あらためて「外来政権」の支配下に置かれてしまった。また、いままでのナショナル・アイデンティティ、言語と価値観が完全に否定されてしまい、新たな「国家」の「国民」になるために、完全に新しい言語(北京語)を学習しなおし、新たなナショナル・アイデンティティと価値観を余儀なく強いられた。戦前の統計によると、1943年に台湾人の就学率がすでに71%に達した<sup>4</sup>。つまり、戦後、少なくともこれだけの人々が新しい言語を学習し、すべての台湾人が新たなナショナル・アイデンティティに切り替えられなければならなかった。戦前の台湾人作家たちがその多くは言語の切り替えによって、作家生命を中

3 翁鬧研究では、森杉藍の『翁鬧生平及新出土作品研究』(国立成功大学台湾文学研究所、2007年)が詳しくその生い立ちを探り、1939年7月—8月に『台湾新民報』に連載されていた、今まで散逸していた「港のある街」を発掘したのがこの論文のもっとも大きな貢献といえよう。

4 藤井省三『台湾文学この百年』(東方書店、1998年)、頁34。

断させなければならなかった。たとえば、1930年代晩期から1940年代にかけて「邱炳南」という筆名で当時の台湾文壇で活躍していた2012年5月16日逝去したばかりの邱永漢が台湾独立運動にかかわり、香港、そして日本に亡命してから、やっと創作活動を再開した。1955年に『香港』で外国人の最初の直木賞の受賞者となった。邱永漢の世代の台湾知識人その日本語の熟練度が邱永漢の直木賞を受賞したことに反映されているといえよう。言い換えれば、台湾に留まった作家たちが言語問題のため、その作家生命が打ち切られたといわざるをえない。またこの歴史的な悲劇が台湾文学の発展には大きな支障をきたしたことは否めないだろう。

この過渡期において、いままで中国国民党が日本を相手として戦ってきたため、かつて日本の忠誠的な「大日本帝国臣民」であった台湾人たちが完全に否定されてしまい、新政府からすれば「裏切者」同然ということになったのはこの時代の悲劇である。価値観と歴史観の違いから生じた矛盾ともつれが国民党側と台湾人側との緊張に拍車をかけていた。1947年2月28日に「閩タバコ」の取り締まり事件によって全台湾規模の流血鎮圧が行われて、両側の衝突がその頂点に達した<sup>5</sup>。何万人の死者も出し、いまだに正確な数字が不明という状態のままである。それ以後、1949年5月19日から台湾では戒厳令を実施されるようになり、長い間、「白色恐怖」というテロの脅威を受け続けてきた。また、共産党に強い警戒心を抱く国民党政府は、台湾人だけでなく、中国から渡ってきた「外省人」もその粛清の対象となっていた。

このような時代状況の下に、台湾文学が戦後、リセットされたように、中国語で創作されたもの以外、その該当対象外となってしまった。戒厳令時代には、一般の国民教育から五十年間の日本植民地の歴史記憶を意図的に抹消するようになり、戦前の台湾人作家、特に日本語作家は台湾人の記憶と教科書から一斉に姿が消えた。日本に関係するものがタブーとなり、公に日本映画を上映することもできなくなり、日本語の使用も禁じられていた。文化大学の東方語文学系日文組が1963年に創立したことが戦後、初めて日本語教育の復活といえよう。引き続き、1966年に淡江大学、1969年に輔仁大学そして1972年に東呉大学で次々東方語文学系日文組が設立された。日本語学科の人材養成が、日本研究より、ビジネス関係のニーズから来たものである。そのため、日本語学科が創立され以来、そのカリキュラムには日本語教育をはじめ、

---

5 台湾の「二二八事件」について、すでにキャンンに入っている代表的な一冊は史明『台湾人四百年史』（音羽書房、1962年）である。最初日本で出版され、日本語版しかなかった。むろん、台湾で発禁となっていた。台湾における中国語版が、戒厳令の解除以後の1998年に初めて出版された。2012年、最新の改訂版は出版される予定である。

政経関係が中心となっている。また、日本文学の場合には、日本文学のキャンオン作家および作品が研究の重心となっている。古典文学の場合には、源氏物語をはじめ、王朝物語、軍記物が中心となっている。日本近代文学研究の場合には、夏目漱石、森鷗外、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫など、日本文学史に現れる代表的なキャンオンがその研究の中心となっている。日本植民地期における在台日本人と台湾人作家の日本語作品が一部を除き、台湾の日本文学研究の射程からはずされている同然である。

1987年7月15日より、戒厳令の解除によってかつて暗闇に葬られた日本植民地時代の歴史記憶が少しずつよみがえり、その後、台湾文学学系と台湾文学研究所の設立にしがって、戦前の台湾人作家の文学作品がはじめてその脚光を浴びた。しかしながら、戦後言語教育には変化がおきたため、戦前台湾における日本語文学研究がほとんど翻訳をとおさなければ進められないということが現状となっている。翻訳の品質も玉石混交のため、戦前の日本語文学研究において、テキストを正確に把握しうるか否かのことさえも危ういものである。それから、前述したように、日本敗戦以後の政権交代を経過したため、台湾における価値観とイデオロギーが完全に逆さまになってしまった。戦前の作家およびその文学作品には「抗日」の姿勢を見せていたか否かによって、作家とその作品の価値が決まることになる。歴史的清算をしないまま、戦前の日本語作家とその作品群が戦後の新たな歴史観と価値観によって、裁断され、断罪さえされてしまった。特に1940年代の「皇民作家」周金波、陳火泉による当時の「皇民文学」作品が戦後新たなナショナリズムによって当時の日本統治者に迎合していた「裏切者」文学と位置づけられている。

一方、台湾文学研究が新興の研究範疇になると同時に、日本語学科における日本文学研究もこの新興研究領域に参入している動向がみられる。しかし、残念なのは、台湾文学研究関係者と日本近代文学研究者の交流があまり盛んではないため、いままで両者の研究成果が共有できないだけでなく、対話できるチャンネルさえもなく断絶の状態となっている。このような現象が主に使用言語の問題から来たといえよう。台湾における日本語学科が大学のなかでほとんど「外国語学院」に所属され、学術論文も日本語で創作すると規定されている。特にエネルギーにあふれる若い研究者たちが年限以内昇格するプレッシャーのもとにその学術論文がほとんど日本語のものが多く、このような状況に置かれて、日本文学研究が台湾で土着化することが困難になるだけでなく、その研究成果も日本語限定の学術圏以外には伝わりにくい。結

局、台湾における日本語文学研究にせよ日本文学研究にせよ、「日本語文学」研究においてお互い絶縁体のままとなっている。

2008年魏徳聖監督の『海角七号』を上映したと同時に、ただちに台湾では最も売れる映画という記録を出した。そして2011年同監督が1930年台湾で起こった大規模の武力抗日事件の「霧社事件」を題材とする『セデックバレ 太陽旗』『セデックバレ 虹の橋』二部作を完成し、上映した。『セデックバレ』二部作は上映された当時、この二部作を鑑賞することが台湾の国民運動のようなものとなった<sup>6</sup>。これらの映画はいずれも台湾の植民地時代を題材とされていた。また、2011年2月台北国際ブックフェアで同じく1930年代の「霧社事件」を題材にし日本人の視点から描く、津島佑子の中国語版『あまりに野蛮な』の新書発表会が行われた。現在の台湾で、日本植民地に基づく題材の映画、それから小説が注目されていることは、いままで抹消されてきて、まるで「失われた輪(リング)」のような台湾植民地の歴史記憶がに徐々に台湾歴史の地表に浮上することを象徴している。政権交代によって寸断された台湾歴史は、台湾における日本語文学と日本文学研究の発展と協力しあうことによってその元来の姿が回復されることが初めて可能となるだろう。また、台湾歴史が偏りなく語られる日が訪れるならば、日本植民地時代の日本語文学と台湾人作家たちには初めて真の評価をくだすことが可能であろう。

(Wu Pei-Chen 政治大学台湾文学研究所)

智慧藏

---

6 魏徳聖の『セデックバレ 太陽旗』『セデックバレ 虹の橋』二部作(2011年)が台湾の日本植民地時代における台湾原住民最大の武力蜂起事件「霧社事件」を題材にするため、日本での上映は困難ではないかと推測されている。だが、2012年3月8日から19日開催される第七回大阪アジア映画祭「特別招待作品部門」で『セデックバレ』二部作は日本では初上映された。